

先進繡像玉石雜誌

四篇

信



河合氏



先進繡像玉石雜誌續篇卷第五目錄

伊勢新九郎長氏入道早雲菴主真影二

同上傳

北條又代記述者三浦茂正

今川氏親家督

備中國伊勢氏

興國寺城

孫六間

駿河清水よ里伊豆松崎小浜丸

一錢切

砂金乃直

侍乃衣義

陵戸

大見三人

武家役

江川取五川取乃田租

兩上板

陣僧

行軍太鼓螺

廿一條





伊勢新九郎長氏入道早雲菴主像



信元敬寫

五十四ノ一

伊勢新九郎氏茂入道早雲天岳瑞公乃俗姓を精しく尋  
 るる桓武天皇第三皇子一品式部卿葛原親王又代乃後  
 胤鎮守府將軍貞盛乃二男肥前守維將小十八代新二郎  
 行長乃長男般里母乃伊勢備中守貞國乃女と云  
 北條又代記云伊勢新九郎後北條早雲宗瑞と改号  
 在桓國ハ山城守治乃人也一説ハ大和守原と  
 云あり代又乃先祖を尋るる昔伊勢國ハ伊勢伊勢守  
 平氏貞と云侍あり小松内火長重盛公より十文代乃  
 後亂大皇云く駿河國皇今川氏親京都へ上り公  
 方へ所礼中下國より至る伊勢守教乃息女を中後我妻  
 止か一具おひ駿河へ下り給ひぬ給ふ子伊勢守教子

息駿河守照康と名付。照康乃嫡男太郎貞次二男新九郎氏茂と号し二人乃子息あり何れも京都乃公方様へ仕へ里然ふ御所様い法よりか例あらは御座り終りの世を早く御他東なり其後新九郎ハ関東へ下向り思慮を廻らひ去は今川氏親ハ新九郎ためり姨乃妻を也及新九郎駿河を志し下仕処り朋友氏由を岡岡道せんと荒木兵衛政多目控兵衛山中屋口荒岡次郎大進守太郎有行右兵衛尉と共し七又云合朱國へ下向り駿河國に著たりと見ゆ又代記ハ此條家譜代乃侍ふ三浦五郎左衛門尉茂云乃記せし如く茂云ハ永祿八年乙丑乃生也あく文正又年丁丑十三

歳の時父又郎左衛門尉茂信を表し茂云家を築北条氏政乃仕文正十八年廿六歳乃時小田原不築城し落城の後之浦ふ閑居し年老く江戸ふるたり此家家の事を記し世子傳ふ今乃又代記出是如う後不東嶽山の上里慈眼大師に歸依し入道し浄心と改む其の菴を浄心寺と名付今清水堂の地也徳中なり孫系不普門坊乃地了改めら也今乃又殊樓の下池乃畔あく代地を賜りりか是也御用地了上里かき終く代地物と分へさし命ら也けふ不執事最教院晃海職を辭去く遷化し又周旋也乃中如く浄心乃像をよみ奉る乃弥陀を繪く普門院へ預けしと茂云の孫茂久乃記

不見えり。茂信の承正元年戊辰生也。十一年七月十一日。三浦新井城に落ちしときハ十一歳なり。茂信乃ち父を又郎左衛門尉茂忠と云。茂忠乃ち父を高信と云。三浦介時高の弟あり。茂忠は三浦の道守と茂信との後身違と云へり。此條早雲乃ち卒れり。承正十六年ハ茂忠之十七歳かれハ。氏綱乃ち代子仕一人なり。氏綱又十年ハ卒し。氏康永祿三年ハ隱居し。元龜元年ハ卒し。茂忠氏綱氏康氏政の二代仕り。元龜三年ハ九月十歳あり。卒し。茂信ときハ六十歳あり。父は北家家の事實を圖見せしときハ。茂信と云へり。以て其の記さぬ。よき微せり。不見しと云へり。なり。茂忠共ありと云

五十四ノ二

か如くハ伊勢伊勢守氏貞ハ小松内府乃ち胤子と聞ゆ。今詳ハ伊勢家系譜を考へ。是は鎮守府將軍貞盛ハ男一子ハ人あり。長男惟叙ニ男惟將。此系乃ち祖三男惟敏。二男惟衡と云。惟衡乃ち越前守正度ハ子息多し。一男ハ出羽守正衡ハ平相國入道乃ち曾祖父ハ小松内府乃ち高祖也。夫ハ正衡乃ち弟ハ右系。是ハ季衡也。ハ小松内府乃ち三男と注せし。本ハあり。同と疑ふ。何れと云。是ハ玄孫乃ち子ハ高祖也。乃ち弟ハ輩入へり。理をけ。是ハ祖也。又代記乃ち撰者ハ代説を信せし。ハ別子據あり。ハ今知か。夫ハ次ハ氏貞と云。人ハ伊勢家圖ハ所見也。ハ小松内府ハ代と云。ハ依ハ伊勢伊勢

守貞經乃之小也覺東云又伊勢駿河守照康と云人  
由系圖不見之按駿河守貞推入道一之照安と号  
以照安を照康と訓一あふへ一伊勢系圖小照安入道  
乃子二人長子太郎貞次二男彰九郎氏茂とあり又代  
記あつた依あふへ一氏茂永正十六年八十八歳あり  
卒は永享四年壬子子生也一人形一照安入道卅七又  
一幸ふハ伊勢備中守貞國乃長子伊勢守貞親二男ハ  
新九郎長氏乃ち小氏茂と及むと之也兩説孰も是か  
あをらら今川氏親乃室家彰九郎氏茂乃姨なりと  
云ハ照安入道乃姉妹あり伊勢貞長乃女なりへ一貞  
長永享六年辛巳女乃生年是より後あふへから以

物あつ今川氏親大永六年六月廿三日辛巳大里  
永享六年を距九十二年形里氏親乃家督ハ文明八  
年より新九郎氏茂に十歳乃時形此頃乃京都將  
軍家ハ常德院義熙公形里氏茂兄弟公方様入仕人  
云世を早く所地畧と云ハ依ハ常德院將軍家子仕官  
せし之明け常德院將軍家長享三年女又歳小近  
江國鈎里乃陣中ハ薨去あり形也ハ氏親乃代ある  
之ハ論か一氏親家を襲と年十三歳と云ハ三十歳ハ  
長世一女乃史とあふへ一理形一依ハ氏茂乃姨史と  
云ハ又代記乃誤と知へ一小田原北條家譜ハ相摸  
入道崇徳高時乃子相摸次郎時行也乃子小次郎行氏

其の子小三郎時盛を乃子新三郎行長伊勢備中守貞  
國の女了配し男子一人女子一人を産し其男子ハ  
即新九郎氏茂女子ハ今川義忠乃室家とし其氏親の  
母なりと云此流年歴子於く産ふへ今其後人室  
町季世記に伊勢新九郎盛時乃其長氏出家後早雲  
宗瑞と云伊勢守貞國ハ外叔乃甥なり今川義忠ハ  
妹婿也氏親幼少頃中乃亂を以て興國寺ハ富  
士郡へ今川家より興人と云小徴と以て外叔  
乃甥と云小建ハ貞國乃姉妹の子也教子や於後子  
詳ふまへ湯本早雲寺あり備中水島小お生  
立身の望ありく康正元年都下上皇足利八代云方義

政より後ハ毎度武勇をあらそ人と云と將軍家より  
賞瓶の沙汰を預ら以憤を發し衆教を退き駿河子下  
見今川氏親より後人と云里東雲草康正元年ハ早雲菴  
主二十に歳乃時ふく將軍義政云廿歳ハあり世給  
年形り備中國水島と云海中乃孤島なり伊勢名守  
乃代國ハ住る長享元年江別御供元乃伊勢掃部助  
盛頼因致ハ盛度同又七なり盛頼ハ伊勢貞純ハ道照  
禅乃弟伊勢肥前守盛富乃後と云盛富ハ建武二年十  
二月又日年越河原合戦討死を其乃子を八郎肥前  
守盛獲と云乃子を彈正忠貞固備中守盛定と云盛  
定乃子を八郎貞興新九郎盛時と云盛時の七發河守



貞通貞雅乃養子と有り又伊豆下り北條乃祖  
と有り備中伊勢の系圖外見ゆ殆どは越中水島外  
生也一とりの説ハ徴有りといへからん今諸説を條  
攀し後の明者をまひ

京都將軍家ハ暹逆一々江利佛陣子供奉去りけり將  
軍鈞乃里ハ薨御立けりよ里生陣乃諸士心々放將  
去りハ新九郎ハ駿河へ下向し甥有りけり今川修理  
大丈氏親を頼りふ氏親あり興國寺の城を興え  
居所とふ其邊を領せしむ新九郎ハ乃時郎從二百人  
ありとわや又代

江利鈞里生陣報交名ハ伊勢兵庫助氏長と云あり是

新九郎氏長なるべきらたゞ將軍薨去乃ち下向  
と云ハ傳へあやまり形何と形也ハ常徳院將軍家  
ハ長亨三年三月薨去ありしハ新九郎氏綱長亨元年  
駿河國ハ生也長亨二年早雲菴主伊豆國ハ討入り並  
山乃城を取と云ハ有り興國寺と云ハ駿河國駿東郡  
原驛の東根小屋村と青野村の際ハあり駿河の府を  
去ると十三里六町あり郎從二百人を扶持せしと云  
ハ火抵六子七百貫許の祿と知へし大と龜ハ世鏡抄  
ハ百貫の領主馬一七人中間三人とあり千貫ハ卅人  
六子七百貫ハ二百一人乃積と知へし

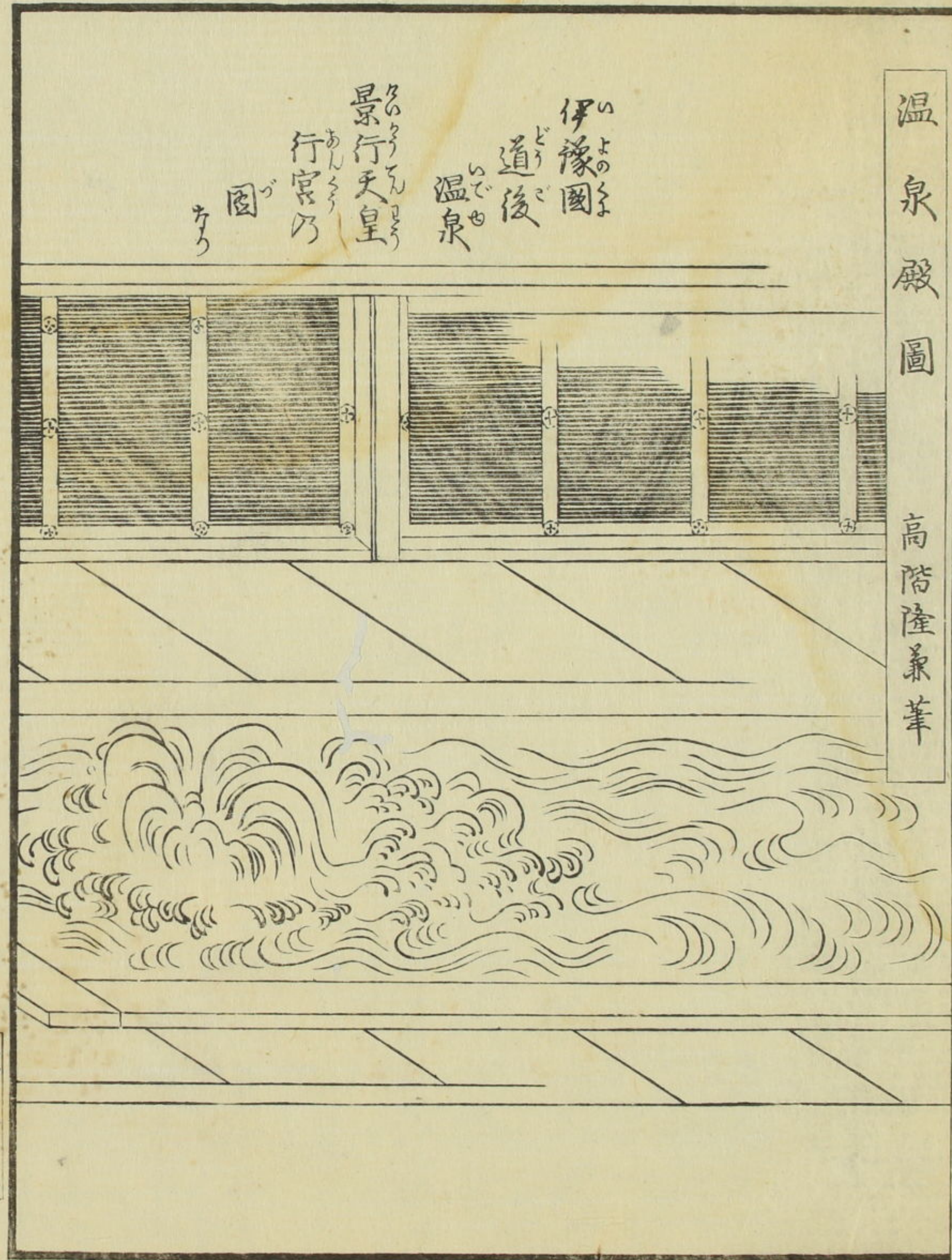
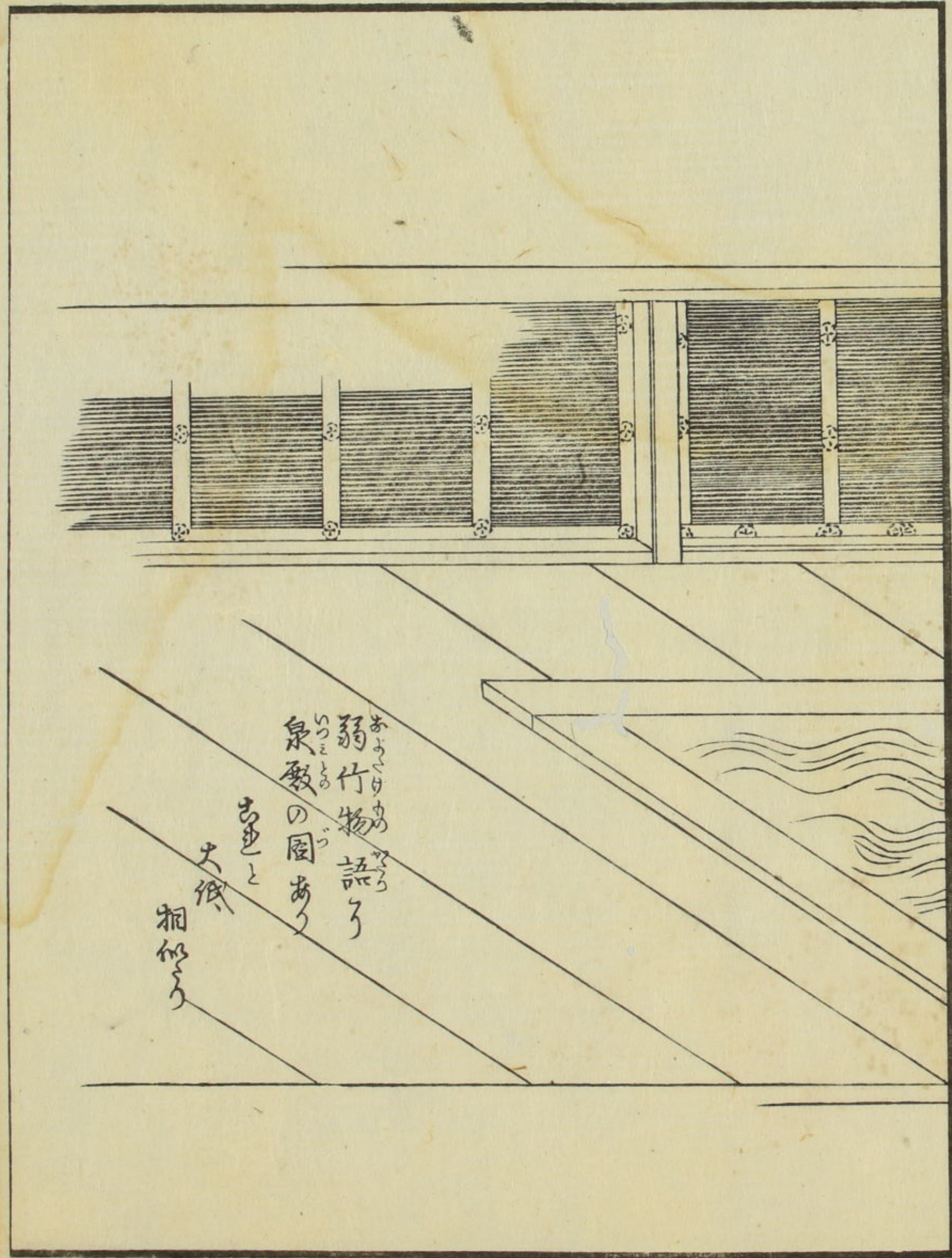
新九郎氏茂興國寺乃城ハ隣國を窺入り伊豆國ハ

おそくゆき左馬頭政知卿の政事ありくく去く國人  
おのりたる地小人等くふくくおけく有根を傳聞  
由其實否をさくろりあらんか為小新九郎と云名を幼  
推乃子息お譲生我身ハ病者きふらん齒せくふ半面を  
越ぬ餘命いくくくおけく弓箭をせくく世を安く過せ  
く知と思ふとく忽お薙髪一早雲菴主宗端と云  
土肥清愛寺  
伊豆國  
君澤郡

孫子用間乃篇小郷間と云内間と云及間と云死間と  
云生間と云之間あり御間ハ御人ノ因縁ノ厚く撫  
くあを用人内間ハ其官人ノ因縁ノ薄く同遺を通  
せくくあを用人及間其敵の間者乃其く因縁

去くあを殺し死間ハ佯く誑詐の言を外におく  
間者小あをを殺し敵乃間者ノ傳泄さく玉敵を  
を信く吾間を殺さ反計の約をけくおけく生間ハ  
能乃人外ハ愚ク内明ハ知者をくく往く探索を為  
去く軍國乃を幼冲乃主小委一病を養入を以く  
と知さ由乃孫子用間の意小原川を五間乃外の新  
間と云へ

早雲菴主病患療治乃をぬかひ弘法大師乃靈蹟を延  
禮一當來乃結縁了とく伊豆國修禪寺子登皇温泉入浴  
く山縣乃閑寂了心を澄しゆく徒徒を慰めんかをぬか



温泉殿圖

高階隆兼筆

松山樵を呼入く思々乃物終をせ内せあをを関を以く  
を乃しみとせし意あきき者と中形也及と人切く  
小伊豆三郡乃山々谷々乃遠近高低東西南北乃行程を  
せし先一郡小十人廿人乃侍をあせと中一國を管隸せ  
るを將帥かく佐々梅原終木富永山本高橋村田かど云  
侍の分限あぐをち中好く子細お侍げくお出せ不思議  
お也早雲菴主あをを関く三島丈明辨を遥拜しけ  
と徒事おあぐは中好く土祇乃示現をるへし一宣吾  
お乃玉を取く諸侍を統領せへき前表なりと深く喜ひ  
やがく駿河へ歸り府へ出仕し今川お伊豆を取へき方  
便を談りお勢の人數を評定せりお菴主云乎勢二百人

五ノ九

杖持し置く以給おちくは三百人乃お勢をたまきし以  
へ伊豆國をを必きく切取く義らせんと云氏親元よ  
菴主乃計策あ敷おとを知る勇士を擇三百人をお勢以  
菴主大お喜悅し清水浦より大船十艘子都合又百人の  
兵士を乗籠とひく順風を帆をあけ明晨お凌を發し日  
中お伊豆國那賀郡松崎仁科田子安良里乃汀お船以  
此海上十八里に時をうらふおせ夫を々里お乃船お旗  
をたき兵士をか甲冑を帶せしかは濱邊在所のち乃共  
以乃外お周章し親を子を携ふお暇なく老大お中推  
なきお日也さきおと山嶺谷底へ逃入たり命生んとを  
おい乃里々々代記

信元竊小早雲菴主乃兵を用ひらば一、天時を考ふる  
小駿河國興國寺より伊豆國北条を辰乃方小當る但  
北条の改知郷乃居處なり。あはれ討つて克をを得る共  
兵士を傷むるを多し。然し、必伊豆を得べく以  
松崎仁科由子安良里の北条乃鄙ふべく去也を討つ  
兵士を傷らば一郷一村を得るは是を保へ。依る先  
兵を清水に發せしと知る。清水より松崎を辰小當る  
去べく興國寺より北条より向ふと同一。此は是年七  
月乃より去らば、疏法は七月午時疏成小あり。虚辰  
子當ると云。清水を孤となせば、虚は松崎仁科由子安  
良里なり。菴主より去る。孤法を用ひる兵を進めしと

知へし孫子小夫兵乃形去也を水より蒙る。水乃形去る  
高を避く下小趨く兵乃形去る。敵乃實をさけく。敵乃  
虚を撃と云。北条の延弱乃将率を抄取く。是は以と  
云と小猶國乃都なり。敵の實地なり。松崎の沿海乃邊  
疆小し。所謂敵乃虚地なり。菴主乃兵法孫子より原の  
をしと又推し知へし

菴主乃兵百人。船より陸小上り。山陣屋を苦草小掛  
く。是は入る住し。土河より高札を建く。三條を約也

禁制

- 一 あり家小諸道具小手をかき除事
- 一 一錢小當る小何あく小取事

一伊豆國中の侍并小土民小並立其位處を去事  
右條々限停止せし免畢由違犯乃輩あはれお於  
を在家を放火せし者なり仍執事如件  
かく菴主乃兵士村々を打めく見致お咽屋と思  
あきとあはれ人乃けりいせか及何者せと檢察るお  
病者なり壯健なり者ハ資財雜具を荷擔しと山乃奥へ  
と退ひ汝お我等病疲一息叶ひひと終は斯く  
以形りと云菴主あはれを別不便乃と形り見逃へるお非  
とく良薬をあくへ兵士をかき看病せしむお乃療養し  
依る兼平乃病人半愈し命拾ふと火およはれあひは  
御恩いひのせうか及報せしと云菴主を信仰火や

形り以退たお親族をたひ終代願末を語りけおは早雲  
菴主首お猿威乃曹を蒙り體お嚴莊乃鎧を被るへた  
あしけ形を鬼神の如く見え玉へと云内心を慈悲乃菩  
薩お我々命乃親お中へ海を渡り急ぎ山を下りて  
親や子乃命助かすく教所れを中よと云お皆山溪を  
歩く退く教我家おか庵を還魂の思をなす悦ひたり  
菴主伊豆お入乃とて免三條の法を立らせしを漢の  
高祖秦お入く三章の法を約し秦乃苛法了苦しむ民  
を濟せしと意と同一且一錢を當りし乃何れも取  
以事と云隋書刑法志ハ高祖開皇十七年一錢以上  
を盜者皆棄市と云お原川りせし開皇十七年ハ皇

朝乃 推古天皇元年丁巳の歳ふるふ長亨より九八  
百九十二年前者の菴主人乃國より入る我從卒を戒め  
一錢以上乃者をたし取去め以然して自己一國の人  
心を取謀となし出せよとて戰國乃英雄一錢切と  
云法を立て以て行軍民を害せざる同とせし但一錢乃  
價小者物との當時何等の品もやと云ハ文明又七  
年の頃砂金十兩錢廿貫小賣買より親長卿記をよハ  
小槻長興宿祿記小見也十兩ハ即今乃に拾文錢なり  
大内家文明十六年ハ 日十文錢を廿貫小交易せると  
月乃下知状なり也  
其ハ一文小金二毫二絲五忽なり又享徳元年大會寺  
登義日記小箇金剛に文日らくハ文捨扇卅文餅

米田斗一升田合又百文とあり一斗の代百廿文。七  
有奇ふく一文ハ八勺二撮小者ハ頃乃量々六十二  
寸半の積を也ハ今京升の九合六勺奇を一升と以然  
せハ勺二撮ハ今乃七勺九撮奇小當里百文九十ハ七  
升六合二勺なり當時金錢乃貴きとを思入也  
是を因に之を度くハ里十里四方の者ハ悉く之を  
出せハ其庄其所乃侍  
其庄との某庄と云義あり私領あり納金以上乃封戸  
を云其所との某所と云意あり國府所管の地也ハ  
御領なり侍との職原抄ハ六位六位乃侍と云下北面  
と云諸司官人と云親王大臣以下諸家恪勤乃云と

云々然也と云其原を審かきせ以軍防令ハ所謂諸國  
乃兵士一年以京上ノ衛門府をよび左右衛士府  
小宿衛承侍を教を以兵士小侍乃目を以也亦形  
其名義ハサトハ箭乃称ハク日本書紀綏靖天皇紀  
其兄所持弓矢を擧取手研耳命を射以一發胸  
小中再發子背小中て也也を殺とある一發再發の  
サと同ハ一萬葉集十三挽歌ハサも揚根張持を所  
手小とら一河遊ワリクミミ投左乃遠離居くと  
云亦く亦サ乃サも箭乃意ありモウフハ羣生の意ハ  
之箭羣生の字ハ宛ハ一宿衛乃兵士箭を帶一後群と  
亦く生亦義と解ハ一者督長を箭大神箭大神と云ハ  
ヤと云サと云同一意と云云

(三四ノ五ノ上)

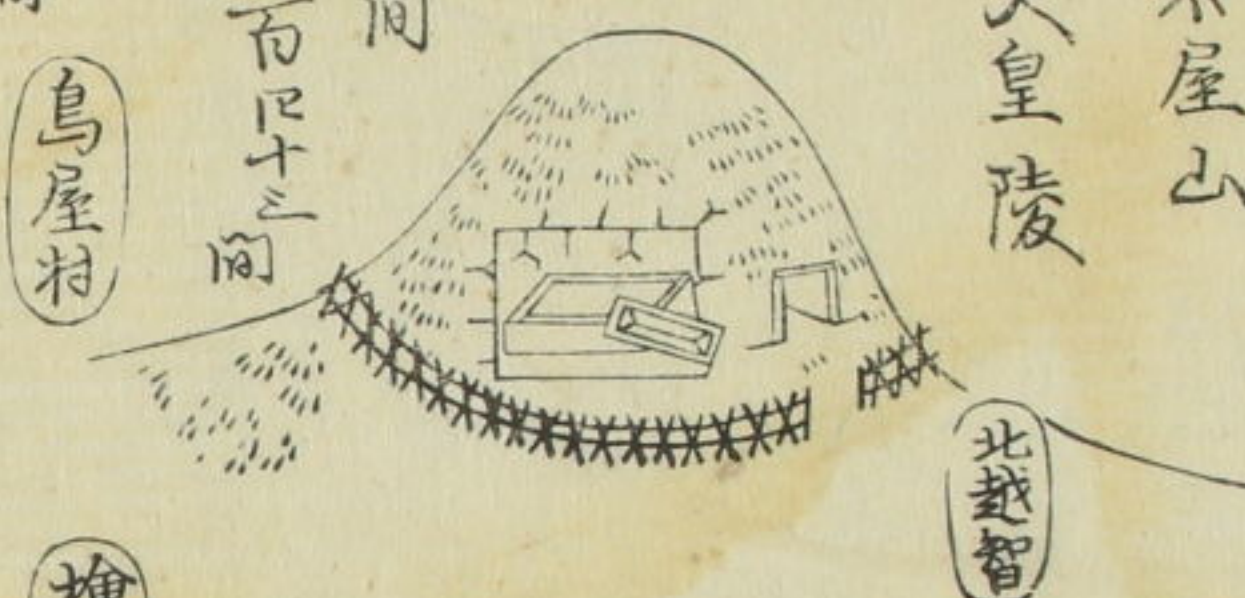
又梓と云名ハ中箭の義と知ハ一然亦乃兵士ハ一國  
乃正丁を三ハ分一ハ川を先ハ定ハ形也ハ私領公  
領の別ハ形  
亦也ハ陵戸亦也ハ在祈乃肝煎を之云也其乃祈前々  
乃如ハ相違亦ハへりハとと印判を出ハ  
平本又代記ハ山守と書ハ亦也戸令ハ陵戸と云職負  
令諸陵司ハ陵戸乃亦藉を掌ハ一云也陵戸ハ墓ハ  
且と義解ハ見ハ天子ハ陵と云ハ例ハ引  
ハ薦河國益頭郡鳥羽陵ハ蘇我稻目乃骸を藏セハ地  
勝間陵ハ國造勝間直を葬ハ一地ハ彼國乃風土記ハ  
記ハハ考ハ入也ハ一其陵墓の事を司ハ亦者



古山陵圖

大和高市郡  
字 茶屋山

齋明天皇陵

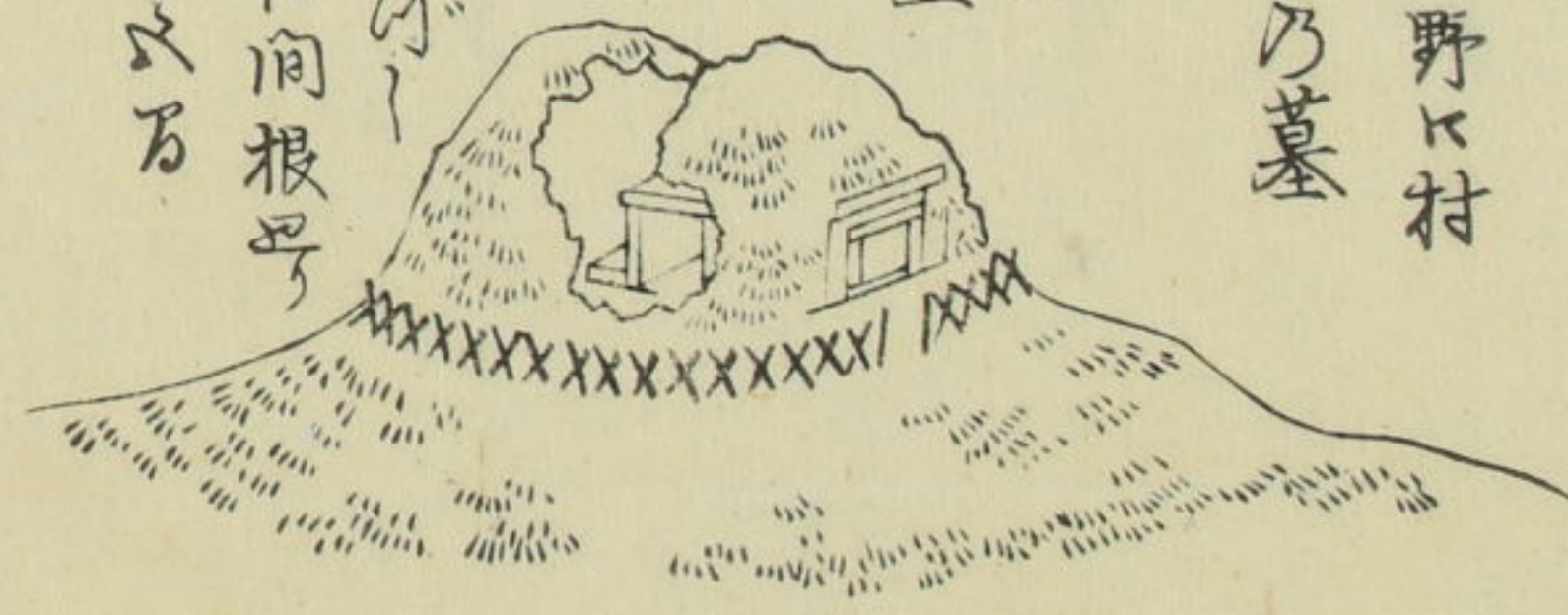


高十間  
根号百四十二間  
垣号  
四十六間  
鳥屋相  
内石棺あり  
高三尺二寸 横三尺  
長七尺六寸 厚八寸  
樽前

同郡野上村  
字 王乃墓

天武天皇  
持統天皇

合葬



御棺を山小塚築きおめなるか故小  
所葬の日山作司を任せらるると  
あり

山陵  
堀あり  
高十間根号  
九十六間

垣号  
二十八間  
石棺  
已れ  
門口八尺四方

五十四

同國  
高市郡

平田村  
字  
高松山  
文武天皇

高二間  
号廿七間  
垣号  
廿七間



同國係上郡

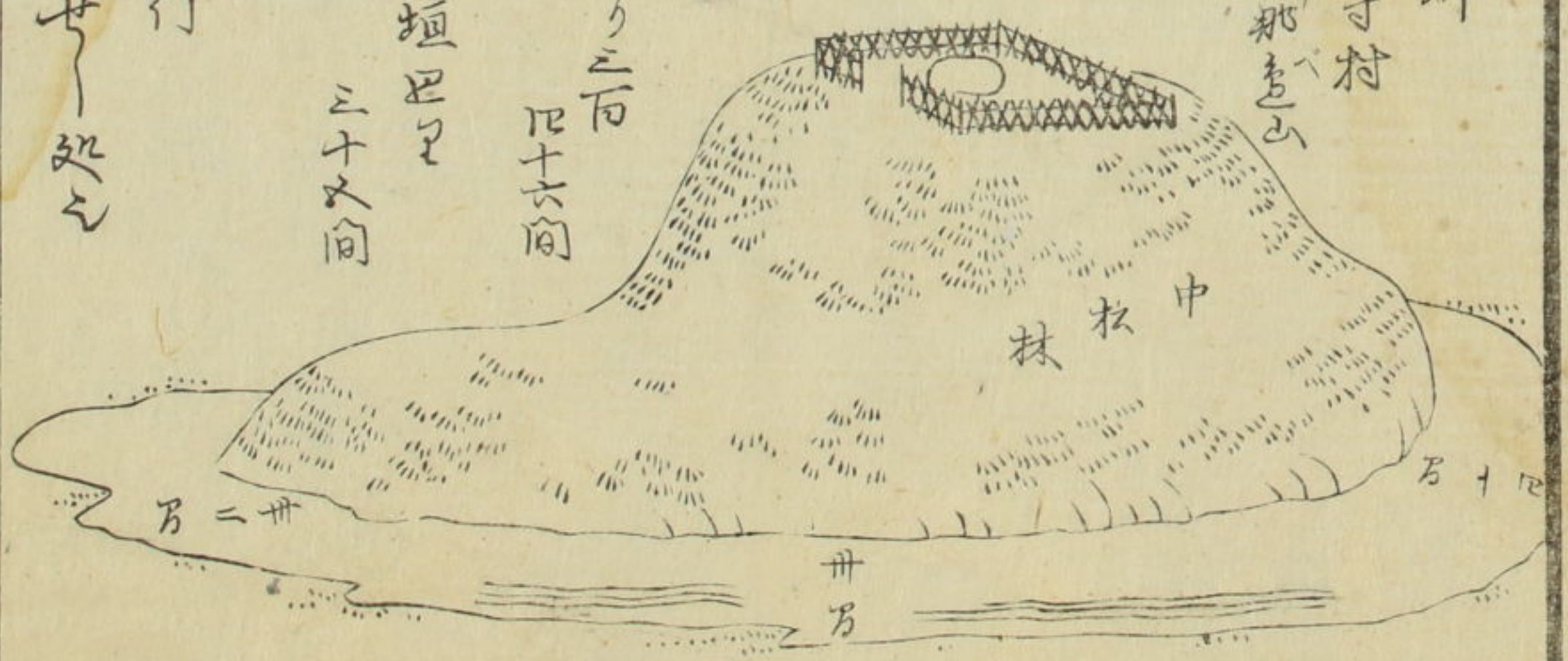
法花寺村  
字 宇和郡志山

元明天皇

高廿九間

根号二百

垣号  
三十二間



以圖元祿十二年  
二月廿八日繪師  
三郎左衛門秀行  
公命依く記せし処

を守家と云渡戸と云

菴主伊豆不入。七日ハ病者乃ため不滞留。十日ハかまふ。佐敷口即兵衛尉を。諸侍大形味方不せく。里取

伊豆志稿不佐藤四郎兵衛尉梅原六郎左衛門尉佐藤藤左衛門尉あをを田方郡大見郷三人乳と云とあり。佐藤ハ忠信乃後と云梅原ハ聖廟乃齋不。菅原氏と云。菴主不。松崎よ。大見郷不。關戸播磨守信父子。人乃。辰城深根と云。如不引出。六七十百人を隨へ。矢倉搔楯。辰

を一時せめ。責書と。告信父子を首と。女千餘人一人ハ残。あをを。武藏を示。聖日北條。御所を焼討。戦乃術を失。浦を。落

今按不掘越乃御所と云ハ伊豆志稿不此条乃西八幡。乃北今島と方。御所内と。水道を去。堀越と云とあり。後。佐馬頭政知郷乃。御所。政知郷ハ。義教。家乃末子不。東。山左府義政。乃弟。天龍寺不。香嚴院乃唱。食。長祿元年。月廿六日。還。左馬。不任。関東不。向。武所不。住。不延

徳二年正月又日長子茶々内御曹司乃ため傷害あり  
行年又十七けご一亂倫の因り一朝一夕乃てふ  
あり以強越の家政久しく整理せ以父子夫婦嫡庶の  
分定ありさしりか故なり詳ふ女家菴豆の俸食を盡  
食せしむ是れ依り去りまど小松崎入る其の年  
直に此條を取しおへあり以我乃説兄長な家を以  
あつて畧と

菴豆よりぬ菴豆入住しゆ此條乃亂を討し一國平  
均小治中よりか皮掘越乃知所附むか子を菴豆乃臺所  
領子加え我の他よりか本乃地頭をありためり此以爰  
小於く國人の以りか菴豆を此條教と稱しりり

菴豆伊豆を取る地頭を改補せ以君澤郡之津松下三  
郎左衛門尉江梨乃鈴木兵庫助土肥乃富永三郎左衛  
門尉那賀郡田子乃山本右郎左衛門尉加茂郡豊見乃  
高橋将監妻良乃村田市依なと云ふ乃我の本領を安  
堵しり相互の埒域を守り以菴豆より服事をたとへ  
の太公望齋を治めり其君臣乃禮を簡ふ其俗より  
従ふと云し一同し平なり

菴豆諸地改をいれ免る云國皇乃為ふ良の子なり地頭  
の親なりあはれなりあはれなり往昔より定むる道なり争  
かあを也之を無ざらんや世境末におふ以我家破深く  
志く百姓年中の耕作を檢地し日川もなを所をを以

有といひかけ取出乃外支辨棟別登山乃役をかけあ  
 ら持分ほど乃物をおし取代  
 信元云あま上枚家收斂乃大槩をうりひあふ了  
 とを耕作を檢地し取と云は年々稀乃榮衰を見  
 拜刈し然し納貢を定むおろ蓋令前祖法と云は  
 大寶元年より前の法あり舒明天皇十二年不定め  
 らしにふ處なり楚乃法より六尺四方乃地を得る穀  
 を民一日乃食不充て三百六十日不三百六十尺  
 方乃地と以六尺四方乃地を得る穀を量也及方六寸  
 深二寸又分あり即今伊勢大神宮に現存し伊  
 勢安東郡尊當沙法文子寸法を志於せり此量今乃升

一升三合九勺有奇を容以穀を搗く米今升乃九合六  
 勺有奇を得べしと較定る年々豊耗ありと也省之  
 以穀三石六斗乃中より一斗又升八合四勺を祖と名  
 付く公不収め餘三石四斗四升一合六勺也民乃有也  
 楚乃他子調庸を収め總十分乃一不當法あり  
 大寶元年新令を頒たし後方又尺不測る穀を法と  
 おさし乃之を履く十分一乃法を改めらるしと  
 形し中々慶雲不改定ありと全く令前乃法不復せ  
 らしとみ延喜式より定ふたがみと形し又量通  
 へ爰に鎌倉末幕下乃制も又十分一乃或家奴と云と  
 累にあり一段乃地より又升乃米を其國の守護所子収む

ふあせなり。是を守護兵糧料と云ふ。是は伊豆國の  
田二千八百十口丁拾芥乃段別又升八千四百七石八  
斗今量千三百六十二石三斗一升形。今儀法云子八  
百九十二依一斗奇を伊豆守護職乃收納高と以ての  
後京都將軍家乃ち。兄也。氏定あり。皇統南北と  
分也。天下擾亂の際國々乃租貢運上乃路絶。關國の  
稻穀を倉く。地頭乃有となり。終に檢地收斂乃法を三  
四斗取との。一歩六尺に方乃地乃稻小に合三斗餘乃  
米を獲を十分。六分を民子與へ。二分を上斗取を  
云。然ハ一段三百六十歩小一石八斗に升八合を獲。六  
斗一升九合二斗餘を小納め九斗二升八合ハ勺

餘を民小與ふ形。五斗取との。一歩六尺に方乃地  
稻小又合乃米を獲を十分。六分を民子與へ。二分  
を小納め。一段三百六十歩小一石八斗を獲。九  
斗を云。九斗を民小納る形。米を又斗取乃地。小  
口斗分を收め。口斗取乃地。て三斗分を收め。民を  
富しむる。早雲菴主胸中の秘と志を盡し。  
菴主伊豆を平け。北条不入。む。遠江守時政乃舊跡を  
修め。居城と云。は皆人北条政と云。菴主大悦  
。曰。北条家関東武士乃棟梁と云。九代繁栄百又十年  
乃久しきを經。我。我。諸人。夫。乃。名。を  
よべ。我。中。平。氏。の。由。平。氏。の。由。我。彼。を。續。へ。き





關八州伊豆圖

早雲庵主高國寺  
 よし起る豆列を平け  
 相列を并せ西上扱と  
 戦ふ諸城の方位大依を  
 あゝ小掲示ひ

北条家全く關八州へ  
 兵を賦せし氏康の  
 時より此圖を以て  
 推考せし

弼氏定乃曾孫也。是乃古河成氏朝臣。持氏卿也。親しく  
思ふ也。山内也。持氏卿乃能たふ安房守憲實の後也。  
成氏朝臣也。是を討して。父兄乃讎を報ひんと望  
た。是也。面上。扱相争ふ根元なり。

明應三年十月又日上。扱宣正。又十一歳ふて。幸以家督の  
子か。依く兄刑部少輔朝昌の子朝良を養子とく。家  
を嗣く。朝良弱一家老権を弄く。公國亂多く。山内乃上  
扱顯定。の時。小口十一歳將畧威力と由。強壯形。是ハ  
於く早雲菴主兵を相摸み出。小田原乃城主大森筑前  
守實頼。三浦導寸と。三浦荒井城。戦ふて。小田原小勢  
の無を時とく。急み攻落せ。

小田原城主大森實頼。儀同三司。後京伊周公。十代  
信濃守氏頼。入道。守柘菴明昇。乃長男也。氏頼ハ鎌倉  
持氏卿。小従く。功あり。ほとり。氏字を賜ひ。と云。史  
より相承く。成氏朝臣也。小従。扇谷乃上扱。と。親  
か。り。形。也。

早雲菴主也。小田原乃城。子入て。手く。先了。上扱朝  
良。乃實父。刑部少輔朝昌。の年久く。任をり。ける。相摸國  
高座郡大庭城。を攻落。引續。のく。三浦陸奥守義同。入道  
導寸。乃能。是。大。岡崎城。を圍。ける。導寸。あら。え。人。城。を  
落。く。臣。吉。城。ふ。入。菴。主。ひ。い。く。押。寄。せ。め。く。は。後。爰。を。也  
打落。せ。也。録。倉。み。く。一。合。我。志。く。叶。え。人。三。浦。乃。郡。秋。谷。乃



大くむせぬ志が支からくして新居乃城子楯籠不  
ふ不菴主もくんが佐原山を打越終了導寸父子を滅し  
去るば今相摸國八郡乃甲乙人にお打のせし小田原  
へ出仕しけせは菴主兵を起し二十一年がうち不伊豆  
相摸兩國を平均おしけせ

菴主乃兵法孫兵小原川をささげ加へお風土自他  
乃妙を以て以元弘建武より以降關東乃兵士陣僧と  
稱し諸寺乃僧を隊伍し列しお飛脚を諸寺乃役と  
おしけふを菴主もくく停止せらぬ駿河沼津妙海寺

一 諸寺

不傳ふ不菴主袖判乃  
文書を以て證をへし

一 陣僧事

一 孫柳事

在望と海少若く族  
もく若公てははを若也仍  
柳を也例

永正止し六月

沼津妙海寺

由也と申其法式を三らせしは菴主を以てし見と  
を以てし信元嘗て其畧を聞し行軍旗本を以て中  
置前後左右乃口備を懸し中軍の大手不矢倉をよて  
太鼓を掛時を計り由也を成しぬ中軍不螺を帶させ

此一事佛不淫をふ  
似く去からん全く夏  
相乃耳目を新ふせん  
か為と知へし又行軍  
不螺太鼓を用ふ不  
を軍防令了鼓角乃二  
川を用ひし遺制と聞

北斗を觀く矢倉子且刻乃太鼓を擊ハ中軍螺をふく  
あせを一番螺と云次子熱陣あせ小應く螺を合ハ  
兵士起く支度せし一演刻乃太鼓をりては中軍二番  
螺をふく次子熱陣あせ了應く螺を合せ兵士こを  
食事をかハ刻乃太鼓をうくは中軍三番螺をふく  
次子熱陣あせ小應く螺を合せ畢く前左中  
後と次第子立をらみと形りあせ行軍乃式形り北  
記ハ云外とあ乃外陣列隊伍乃法式書あり文長きを  
大同小異ハ以く畧也

菴主豆相乃壯士を收め威をうやく關東小振入か川後  
男新九郎氏綱嫡孫國王丸後ハと三世乃齋華志と子  
氏康

繁思乃色をあるくけふ後と小若く人乃為ふとく廿  
一条乃教訓を述ら教を乃第一小佛神信ハ中庵事  
聖德太子憲法第二篤く之實を教へ吉備大長私教類  
聚十三佛法を伝へ事貞永式目第一子神社寺塔  
修造乃之を載ら也了意了原ハ一形らん是等とハ  
今ハ神祇僧尼を首子置也一餘意乃之  
第二ハ朝ハ早起第一子夕子又ハ以前子寢定べ一寅  
の刻子起行水おのこ身乃行義を整せ乃日の用所妻  
子家來乃者共子中付さく去以前子出仕をべ一第ハ小  
手水を川ハ女前子廁より厩庭門外より見込里ハ川  
掃除せへき所を似合乃者ハ言付手水を庭く巻入庵

第九の禰をまろと身乃行なり

九條殿遺識子先起く属星乃名字を称まろと七遍と  
あふと同意をふべし

第六の刀衣裳人乃如く結構子有へしと思へり以見  
苦しくおくと心得へし第七の仕乃時々中及せ  
生宿所了有へしと思ふ共髪をば早く結へし第八の仕  
仕乃時む休と御糸へ糸系へりす

魏曹操乃人己を危入くせんとを教時乃己輒心動く  
と云所親の小人子刃を懐みし来らぬめてお色を斬  
又我眠中みごころ近くへり以近川か及便人を斫  
む亦自中知を左右深く慎へしと云後乃陽眠て見居

を色は所幸一人以ておの被をりて覆以しを因便斫

殺まおより眠と左右敢近く中乃如か足しとわや  
世説小 或は呉越乃銭武肅王假寐せし時前におあふ爐

火燂湯せし童子側子侍まおあふ沸湯乃寝を驚かせ  
むとを恐連子水を以て洗しを武肅窺見く是童

子を殺せしと歸田 詩話 あふ英雄乃意と合せ見く菴豆乃又  
武兼備せしを知らし

第九の仰出まお新く一とあらば遠くお祇候中たて共おの  
となく唯と以返辭を中頼り水糸へ糸以側へし以より  
謹く承まお登り第十の所通りおて物語中とまお人乃  
あふりし居へり以傍へよおへし第十一數多交りし

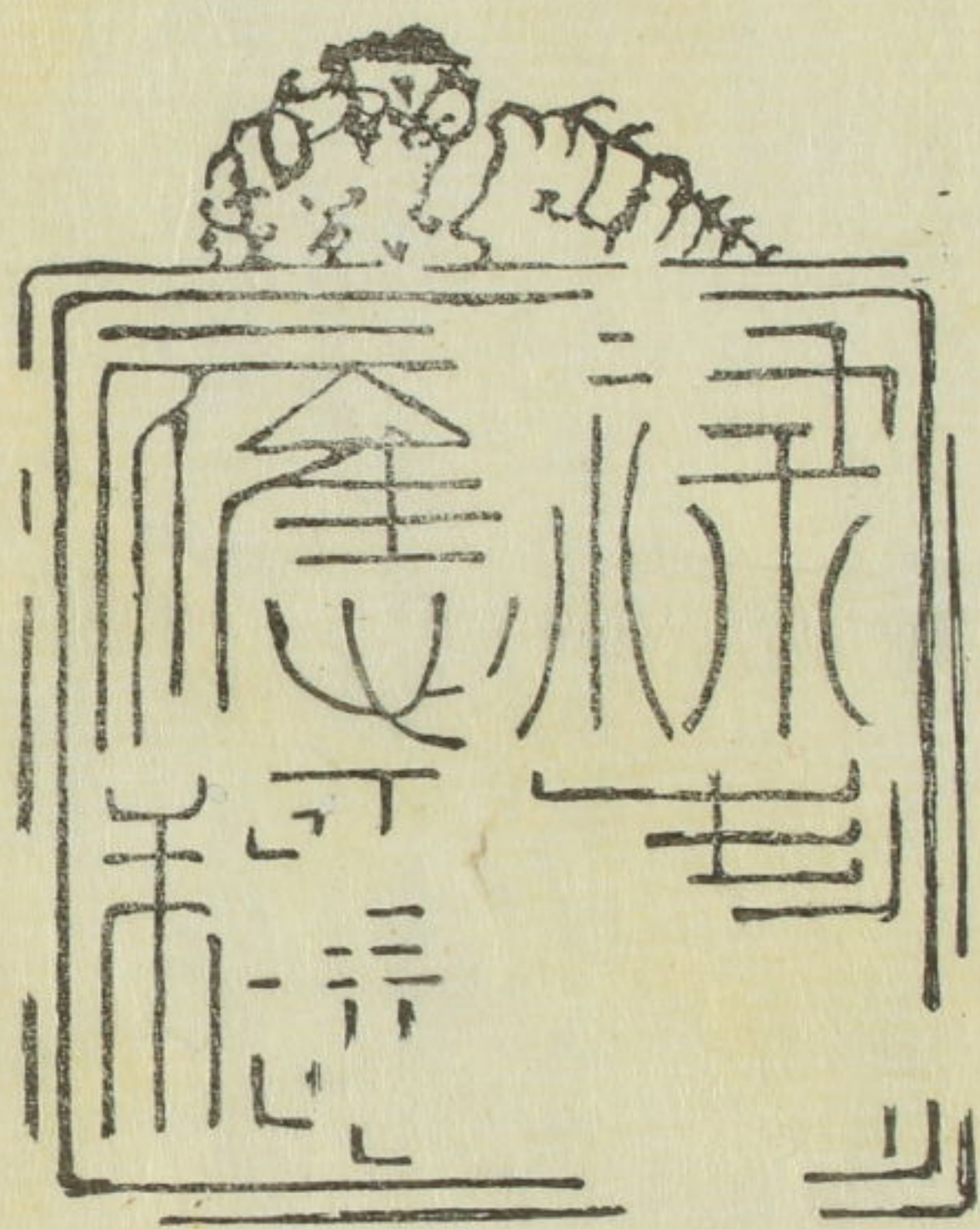
事かか色と云事あり何と人々任さへき形なり第十二  
サの間あらば物の本文字あふも乃を懐ふ入川孫り人  
目を忍ひ見へし第十之宿老以掾了祇候乃と云腰をせ  
おまゝ手を以て通ふへし第十に上下万民小對し一云  
水向虚云々中へからし第十又欽道おき人々至手小賤  
學入盈し第十六奉云乃隙ふ馬を乘習入盈し下地を  
邊者小乘からひく用若手綱以下を務古きへき形なり第  
十七良友を求めへきは手習學問の友也悪友を除へき  
は基業基苗尺八乃友あり第十八宿小海らば厩面よる  
うらへ廻り四壁狗寶を塞きおしら入盈し第十九夕小  
六時小門をせくとたく人の出入小依く用閉をへし第

廿臺所中居乃父の廻り夕々我と見まはし隙く中付弟  
廿一文武多馬の道を常形なり記さる及むん文を左ふし  
武を右ふ武教を古乃法兼く備へまんハ有へくし  
漢書公孫弘傳小守成を文をよふし遭遇を武を右ふ  
まと云又檀弓註了表ハ尚右右ハ陰あり吉乃尚左左  
ハ陽ありと云武ハ凶器故小菴主右文乃聖誥を反用  
ありしと例也  
菴主よく兵士を教導しちて農桑を勸耕せしかは豆相  
乃地下人衣食足て父子夫婦兄弟和睦して乃見ふ乃時  
関東乃公方と諸將乃馳走し多教古河乃御所左馬頭政  
氏朝長嫡子高基朝長と父子の間新せしあはは政氏朝

北条家璽章

禄壽應穩

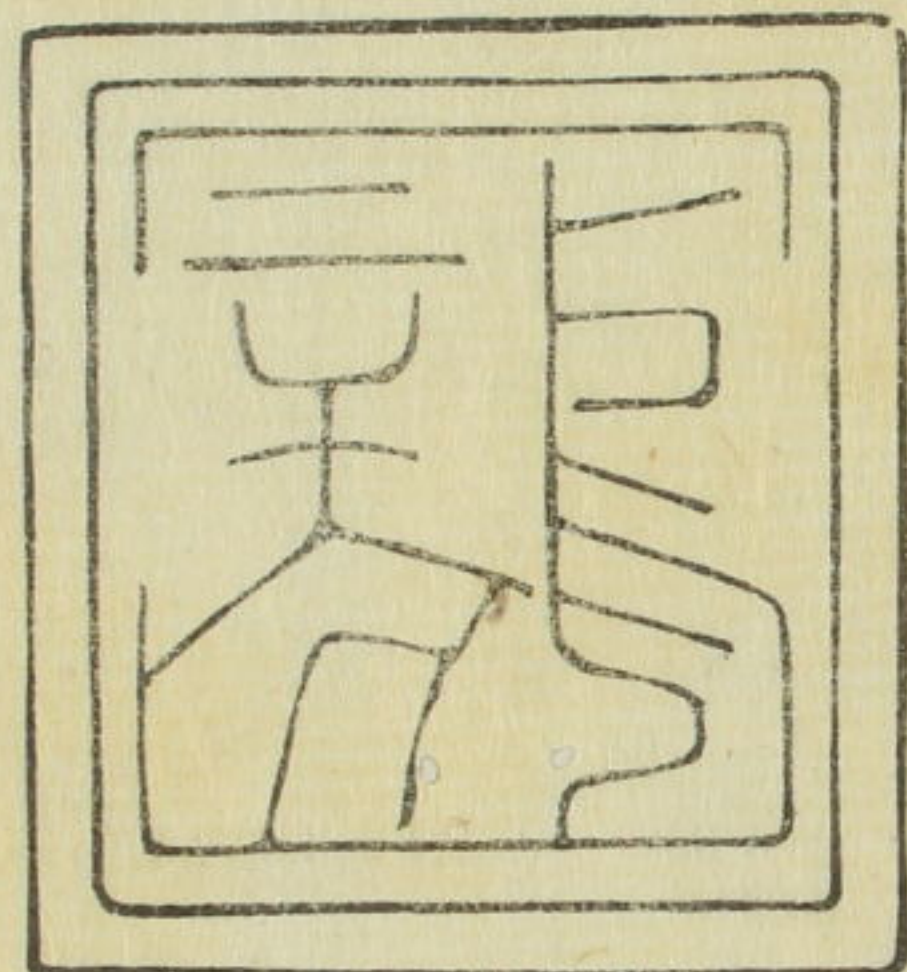
或云禄北壽條應早穩  
乃假音一  
なりと云さゆあらん  
録倉比企



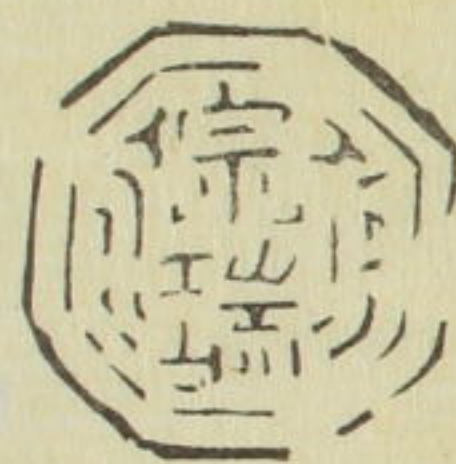
なり・松らハ菴主乃造意  
を各へきハ桂林漫録  
應瑞と訓ハ誤なり

谷妙本寺ハ庚寅正  
月十四日乃筆書ハ  
以印を捺大分あり  
享禄二年庚寅形  
氏綱大分論あり  
菴主廻一十二年

龍



宗瑞



早雲菴主の印と云

北条家大永享禄天文  
乃筆書ハ捺大分氏綱  
龍虎乃印と云ハ前の  
虎の印と是とを云り

臣乃二男生實の義明を寵愛法不遇たり故其  
とく父子乃親睦也兄弟乃睦報き終るを夫婦和せし君  
臣庚子蕭牆の亂より邦城其禍を醸ま上校両家の元是  
管領乃驕氣を以て豺狼の暴戾を御ま故に與奪常如く  
民を養ひ國を富み暇ありて其他乃諸將た良戦人  
て地を廣むを専とふまはる菴主を是と及して内  
訓諭を敷外は恭儉を施ま其天に開く處人の支入  
へきありて永正十六年八月十六日八十八歳乃上壽  
を以て卒以その小興國寺一城乃主より起り豆相乃  
二列十一郡九百卅六村廿九万三千六百又十三石乃地  
を有り緑壽とよみ金一と云へ箱根山湯本小葬り

早雲寺殿天岳宗瑞大居士と云

鎌倉右大将頼朝卿乃兵を起しや高倉宮の令旨を奉  
て其身累代乃將種ふく舊河部乃兵士を催使はる  
形り然も不稿乃敗績僵木乃奇窮を免むとて以等持  
院將軍尊氏數々軍を破らば單身馳驅去り九列の外  
小遜也たりし也光嚴上皇乃院宣を得て始て兵氣  
振ひ將畧伸ふと城得たり抑帝威乃烈たふる武徳  
乃嗣子処あるか一張乃宿紙何乃力かある蓋衆心を  
一致し威權を張るる為なり所謂力を以て人を服  
ふも乃あり然る右幕下廻り々陵土未乾かざふる長  
子幽殺せり也二子暴傷し亂嗣断絶以將軍捐館の後

數年あひだから以もつ實まこと送おくり陽ひかり將軍しやうじん義詮ぎせん卿きやう南軍なんぐんのため了おひ京きやうを落おとし  
せし上皇じやうわう賀が名な生なまふ幸さいせらる也なりと申まを後ご人ひととあそび  
諸大將しよたしやう強勢きやうせいを以もつ威いを逞たくまくせしと申まを制せいを教しやくと能あた  
以もつ加之か天壽てんじゆを賜たまへ以もつ早世さうせいせし兵馬へいば乃なり威い推おし中ちゆうふして  
熄ひふちかき鹿苑ろくえん院いん將軍しやうじん義滿ぎまん幼冲ちゆうちゆうふして職しやくを讓たまふ  
出いかば幕府まくふ乃なり大小たうしやうをべし管領くわんりやうふ決かし終はふ其任そのにんを  
と抗衡かうかうをゆるすをは家懐紙書けかゝいし抄しやう乃なり威い推おした京きやう蓋ぎ  
細神こじん細林せうりん乃なり間まふ行ゆをゆるす乃なり關西くわんせい乃なり梟賊せうそくと成なく海  
外がいふ入いる倭寇わかう乃なり醜しゆう戯ぎを放はなちゆる為ためと云い共禁遏きんあつせし  
力ちからゆる冠服くわんぷく令しん根こんの重賂ちゆうろを受うけ日本國王にっぽんこくわう乃なり封冊ふうぼく乃なり穢  
りしを以もつ壹岐對馬いつきたいま乃なり海賊かいぞくの巨魁きよけいを擒とらへ敵てきを

與人ひと鎌倉右將かまくらゑしやう平中將へいちゆうしやうを南都僧侶なんとそうじよお與あへらせしと云い  
敵てきふ下手人かたしやうじんを渡わたす法はふや有あり議ぎせし者ものあり僧侶そうじよも亦また  
人ひと乃なり囚いを受うけ勇ゆうとせふる是こゝ以もつと云い也なり我國わがくに  
の内うち乃なりと云い何况いかんやあはれは西蕃せいばん乃なり外國ぐわいこくなり鹿苑ろくえん院いん將軍しやうじん  
俗世じやくせいの火道たいどうを疏そせし乃なり在ありませし故ゆゑせし徒いたづらふ處ところ端は  
を膺うけて空位くうゐふ立たちふ乃なり之こゝ然しかし後のちに授まげ長城ちやうじやう關かんして  
家督けとくを争あひ兵馬へいば乃なり推おしす乃なり陵夷りやうい去いる言いふたら以もつ關かん  
東の政せいもあはれと頡頏けつけんせし乃なり之こゝ爰あふ菴あん主しゆの江列かうりやく曲陣まがじん  
乃なり散兵さんぺい乃なり之こゝ柳營りゆうゑいの政せいおとるへ將威しやうゐ乃なり振ふるえ所ところを  
て東下とうかう以もつ不智ふちと云いへり今川氏いまがはうぢふ依より一城いちじやうの立た  
とあはれをゆるす乃なり又また十堀じゆくわい越こえ乃なり政せい乱らんせ民苦たみくるむを時ときと

て兵を起し、民の疾苦を救ふに努む。是を安んずるに  
湯武の跡を習ひ、治を施し、舊俗を改め、新制  
の薄収を興し、民を安んずりて、國を治む。至  
是を迎へ、是を遅し、大旱の雲霓を望む。如し、蓋  
衆力を併せ、敵情を料し、人子取らば、以て用と爲すと云  
行軍、本義あり、是る所らん。古河御所乃勢微弱あり、  
猶瑞泉、基氏、永安、氏病、乃威を張る。永享乃讐怨を復し、  
諸將を統領せんと、庶幾せらる。其將強勇あり、士  
卒怯弱あり、攻取がたし、必敗亡する。是を陥と云  
孫子地を從ひ、其必亡べきを察知し、時を待たず也  
形篇、  
是を菴主胸中、數孫子あり、開國乃洪基を草創し、

然る菴主没し、二十年、武藏川越乃軍を克し、廿一郡  
草薙し、又十餘年、上野平井を取し、上杉越後を克し、又  
十餘年、下総國府宿了戦し、二総平均し、又世百餘年の  
間、坂東八列、小虎踞し、七十日城了龍盤を、其根本を  
興國一城、二百人の衆あり、誰か此衆を得ず、必ず此  
衆を用ひ、必ず其難いかな

先進備像玉石雜誌續篇卷第又終



嘉永元年秋九月  
栗原孫之丞藏板

京都書林  
大坂書林

東都書林

三條通外屋町	出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
日本橋通一町目	湏原屋茂兵衛
日本橋通二町目	山城屋佐兵衛
日本橋通二町目	小林新兵衛
芝神明前	岡田屋嘉七
本石町十軒店	英大助
横山町三町目	和泉屋金右衛門
淺草茅町二丁目	湏原屋伊八
下谷池之端仲町	岡村庄助
下谷御成道	英文藏
神田旅籠町一丁目	紙屋徳八

